

【話すということ】

「話をする」と「おしゃべりをする」とは大きな違いがあります。ときどき、先生たちから「くん(さん)はおしゃべりが始まるとなかなか止まらないくらいなのですが、いざ授業や朝の会などでお話をしなければならないことになると急に静かになってしまいます。」というような話を聞くことがあります。「おしゃべり好き」=「話し上手」の関係は必ずしも成り立ちませんし、こちらもそう思っているはいけないのでしょうか。

私たちがこの小学校の校訓に示している「表現」というのは、「自分の思いを伝え、他者との関わりを深める」ということですが、子どもたちには「相手を思いやる気持ちを持ちながら自分の思いを伝えていく」ことの大切さを伝えていきます。この点から考えると、ここで目標にしているのは「おしゃべりができる」ではなく「お話ができる」の方であることがお分かりいただけるでしょう。

校長室だより10号に、低学年の子どもと話すときに、しゃがんで話すことができる高学年の子どもがいるということを書きましたが、まさに、一つの答えはそこにあるのではないかと思います。それは、しゃがむ子どもからの無言のメッセージの中にあります。それは「私はあなたと対等だから、安心して話してね。」というものです。この中の「対等」というのは、もちろん会話をするときのことであり、下級生と上級生がどんなことでも対等であることはありません。それと同じことが子どもと親、子どもと教師との関係にもあてはまるのではないのでしょうか。このように心と心が通い合う関係が大切にされることで、話す力だけでなくもう一つの聴く力も身につくのだらうと考えます。

ここでは、言葉遣いについてはあえて触れませんでした。対等の関係の名のもとで、その言葉遣いまでがよい加減になってよいと言っているわけではありません。相手を不快にさせないような言葉の遣い方を身につけさせていくことが大切であることは言うまでもないことです。私がきれいな言葉に「ためぐち」というものがあります。ごく最近まで、「ためぐち」というのがどういうものかよく分かりませんでした。「ためぐち」という名称がついてしまったために、何かすっかり言葉の世界で市民権を獲得してしまったかのように感じてしまいましたが、本来あってほしくない言葉であると思っています。中にはいわゆる「ためぐち」を「フレンドリーなことば」と置き換える流れもあるようですがそれは間違いでしょう。言葉だけが一人歩きすることはなく、そこには必ずその人の心があらわれます。そう考えると、自然に言葉の世界は美しいものになっていくのではないのでしょうか。

【我慢】

今年の6年生を対象とした中学校の進学説明会の際に、私から6年生に対して、卒業するまでに是非身につけてほしい力としていくつかあげた中に、「我慢する力」というものを入れました。授業中にまわりの子とおしゃべりがしたくなくなるともう自分を抑えることができないのもその「我慢する力」の無さの一つでしょう。確かに、授業の内容がよく分からなかったり、楽しくなかったりすると他のことに気持ちが向いてしまいがちですが、そんなときこそ本当は最後まで授業にくらいついていくくらいの頑張りしてほしいです。しばしば授業不成立という言葉を目にします。それは学級崩壊というものと大きな違いはないような気がします。この小学校ではそういうことはありませんが、まさに子どもたちが勝手に行動したり、おしゃべりをしたりすることが多くなり、教師の話の聞こえようとする子がどんどん少なくなることによって本来あるべき授業の形態がくずれてしまいます。教員が一方的に子どもに「我慢」を押し付けることはよくないですし、子どもが興味を持って学習活動に参加するような配慮がなくてはならないことは当然のことですが、案外子どもたちの身勝手さを指摘する声は少ないような気がします。もしそういうことを言うと、ただちに教師の力不足を棚に上げていると批判する人がいるからなのかもしれません。

ところで、今子どもたちが「我慢すること」を求められるのはどういうときなのでしょう。ある子どもに聞いてみました。そうすると「ゲームができないとき」「ほしいおもちゃが買えないとき」「好きなものを食べられないとき」「行きたくない習い事に行くとき」という答えが返ってきました。この答えがどの程度の子どもに当てはまるのかわかりませんが、暑さ寒さを我慢する必要がなくなり、遊び・学習・スポーツなどをするための場も用意されている今、子どもたちが求められる「我慢」とはそういうものになっているのかもしれない。

今は自分の思い通りにならないことが少ない子どもたちかもしれません。しかし、これから中学校、高等学校、さらに大学、社会へとつながる道の中で、たくさんの困難に直面し、同時にいかに自分の思い通りにならないことが多いかを実感することになるでしょう。そんなときに自分がどうするべきかを考える力はそのときになって身につくものではないはずです。「ゲームができないとき」にどうするかでもいいでしょう。小さなことからの積み重ねが必要であると思います。